

# 森林文化アカデミーと 飛騨の家具業界のつながり

岐阜県立森林文化アカデミー  
久津輪 雅

美濃にある森林文化アカデミーには2001年の開学以来、「ものづくり」という講座があります。地域の森から出る材料を生かして木工品の企画・デザイン・制作を行い「森とものをつなぐ」活動を展開する人材や、木工プログラムを組み立てて「森と人をつなぐ」教育活動を展開する人材を育てています。一方、飛騨地方は古くから優れた木工技術が伝わる地域であり、現代では脚物(椅子・テーブル等)を中心とした日本有数の家具産地です。開学から10年を経て、森林文化アカデミーと飛騨の家具業界の間にはさまざまなつながりが生まれています。今回はその一端をご紹介します。

今年からクリエイター科(林業再生、山村づくり、木造建築、ものづくり)の学生たちは入学後1ヶ月間、共通の授業を受けることになりました。川上から川下までの総合的な学習、その名も「森林から木材、暮らしへ」という授業です。この授業の一環で、飛騨の家具メーカーを見学しました。見学させていただいたのは、いちばんの老舗であり最大手の飛騨産業株式会社です。高山では1920(大正9)年にドイツから伝わった曲げ木技術を用いて、豊富にあったブナで椅子を作ったことから、洋家具産地としての歴史が始まりました。91年を経た今も飛騨が家具産地であることは変わりませんが、大きく変わったのは材料です。ブナやナラなど豊富にあった家具用材は今や枯渇し、大半を海外から輸入しているのが現状です。そんな中、飛騨産業では協同組合をつくり、豊富にあるスギを圧縮して活用する技術を研究開発してきました。10年間の研究の末、フローリング材や家具用材など用途に応じた硬さや好みの形に圧縮することが可能になったそうです。荒廃する森林の問題にもものづくりの技術で貢献する取り組みに、学生たちも感心していました。

(なお飛騨産業では、去年から高山市荘川で企業の森づくり活動も始めており、森林文化アカデミーの横井秀一教授もアドバイザーとして関わっています。)



▲飛騨産業で杉の圧縮技術の説明を受ける学生たち

大手家具メーカーでつくる飛騨木工連合会では毎年、「暮らしと家具の祭典」という新作見本市を開いています。この見本市会場で、今年は飛騨木工連合会と森林文化アカデミーによる「グリーンウッドワーク」の実演が行われました。グリーンウッドワークとは、「人力の道具を用いて、伐ったばかりの生木を削って小物や家具をつくる木工」のことで、森林文化アカデミーでは教育に取り入れています。最先端の機械で家具を量産する飛騨のメーカーが、昔ながらの人力の木工を実演することになったのは、去年、職人向けに行われた技術研修がきっかけでした。グリーンウッドワークは言わば「木工のルーツ」であり、職人の技術研修に取り入れたいとご相談をいただき、森林文化アカデミーで研修を実施しました。それが好評だったことから、今年は見本市会場での実演になったのです。

会場では、各企業のベテラン職人さんたちが丸太からの椅子づくりに取り組みました。来場者はもちろんのこと、飛騨木工連の各メーカーの会長さん、社長さんも「これは面白い」と興味深げに眺めたり、実際に体験したりしていました。これからも森林文化アカデミーでは、飛騨木工連合会のグリーンウッドワーク研修に協力していくことにしています。まさに「森林文化」を伝える学校ならではの、地場産業への協力ができました。



▲足踏みろくろを楽しむ、岡田賛三・飛騨木工連合会代表理事



その他、毎年10月末に家具業界も協力して行われる「飛騨高山・秋の文化産業フェスティバル」では、森林文化アカデミーのものづくり講座の学生たちが作品を展示したり、卒業生が木工講座を実施しています。

今年は飛騨の家具メーカーから内定を得て、来春の就職へ向けて木工技術を磨いている学生もいます。これからも飛騨の家具業界と森林文化アカデミーのつながりは、より深まっていきそうです。

★森林文化アカデミーのクリエイター科・エンジニア科の平成24年度新入学試験出願を、**1月4日(水)から1月18日(水)まで受付ています。**

●詳しい内容が知りたい方は  
TEL(0575)35-2525 森林文化アカデミー管理課 まで